

番号	解答	解説
第3章 主な医薬品とその作用		
I 精神神経に作用する薬		
[1]	4	a 誤 冬場に発熱や頭痛を伴って悪心・嘔吐や、下痢等の消化器症状が現れた場合、かぜではなく、ウイルスが消化器に感染したことによる<u>ウイルス性胃腸炎</u>であることが多い。 b 正 c 誤 小児がインフルエンザにかかった場合、サリチルアミドは<u>使用を避ける</u>必要がある。 d 正
[2]	5	a 誤 かぜの約8割はウイルス（ライノウイルス、コロナウイルスなど）の感染が原因であり、それ以外に<u>細菌の感染</u>や、まれに冷氣や乾燥、アレルギーのような非感染性の要因による場合もある。 b 正 c 誤 かぜ薬は、かぜの諸症状の緩和を目的として使用される医薬品の総称であり、総合感冒薬と呼ばれる。かぜ薬は、<u>ウイルスの増殖を抑えたり、ウイルスを体内から除去するものではなく、咳で眠れなかったり、発熱で体力を消耗しそうときなどに、それら諸症状の緩和を図る対症療法薬である。</u>
[3]	4	a 誤 かぜの約8割は<u>ウイルス</u>の感染が原因であるが、それ以外に細菌の感染や、まれに冷氣や乾燥、アレルギーのような非感染性の要因による場合もある。 b 正 c 誤 かぜ薬は、<u>ウイルスの増殖を抑えたり、ウイルスを体内から除去するものではなく、咳で眠れなかったり、発熱で体力を消耗しそうときなどに、それら諸症状の緩和を図る対症療法薬である。</u> d 正
[4]	5	a 誤 かぜであるからといって必ずしもかぜ薬（総合感冒薬）を選択するのが最適とは限らない。発熱、咳、鼻水など症状がはっきりしている場合には、症状を効果的に緩和させるため、解熱鎮痛薬、鎮咳去痰薬、鼻炎を緩和させる薬などを選択することが望ましい。存在しない症状に対する不要な成分が配合されていると、無意味に副作用のリスクを高めることとなる。 b 誤 かぜ薬は、<u>ウイルスの増殖を抑えたり、ウイルスを体内から除去するものではない。</u> c 誤 冷氣や乾燥、アレルギーのような非感染性の要因も、<u>かぜの原因となる。</u> d 誤 かぜの約8割はウイルス（ライノウイルス、コロナウイルス、アデノウイルスなど）の感染が原因であるが、それ以外に<u>細菌の感染</u>や、まれに冷氣や乾燥、アレルギーのような非感染性の要因による場合もある。
[5]	2	a 正 b 誤 かぜの約8割は<u>ウイルス</u>の感染が原因であるが、それ以外に<u>細菌</u>の感染や、まれに冷氣や乾燥、アレルギーのような非感染性の要因による場合もある。 c 正 d 正
[6]	3	a 誤 <u>クロルフェニラミンマレイン酸塩</u>は、鼻汁分泌やくしゃみを抑えることを目的として配合されている。 b 正 c 正 d 誤 <u>グアイフェネシン</u>は、去痰作用を目的として配合されている。
[7]	3	a 誤 クロルフェニラミンマレイン酸塩、カルビノキサミンマレイン酸塩、メキタジン、クレマスチンフマル酸塩、ジフェンヒドラミン塩酸塩等 — 鼻汁を抑える（アセトアミノフェン — 発熱を鎮め、痛みを和らげる） b 正 c 誤 メチルエフェドリン塩酸塩、メチルエフェドリンサッカリン塩、プソイドエフェドリン塩酸塩等 — 気管・気管支を拡張する（ブロムヘキシシン塩酸塩 — 痰の切れを良くする） d 正

番号	解答	解説
[8]	1	a 正 エテンザミド b 正 d-クロルフェニラミンマレイン酸塩 c 誤 アセトアミノフェンは、中枢における解熱・鎮痛作用をもたらすため、<u>末梢における抗炎症作用は期待できない。</u> d 誤 dl-メチルエフェドリン塩酸塩は、交感神経系を刺激して気管・気管支を拡張する成分。(ジプロフィリンは、自律神経系を介さずに気管支の平滑筋に直接作用して弛緩させ、気管支を拡張させる。)
[9]	4	ア 誤 かぜ薬は、ウイルスの増殖を抑えたり、ウイルスを体内から<u>除去するものではなく、咳で眠れなかったり、発熱で体力を消耗しそうなときに、それら諸症状の緩和を図る対症療法薬</u>である。 イ 正 ウ 正 エ 正
[10]	5	1 正 2 正 3 正 4 正 5 誤 ブロムヘキシン塩酸塩は、去痰作用を目的として配合されている。(カフェイン、無水カフェイン、安息香酸ナトリウムカフェイン等が、抗ヒスタミン成分や鎮静成分の作用による眠気を解消する目的で配合されている場合もあるが、カフェイン類が配合されているからといって、必ずしも抗ヒスタミン成分や鎮静成分の作用による眠気が解消されるわけではない。)
[11]	5	a 誤 サリチルアミド-発熱を鎮め、痛みを和らげる。 b 正 c 誤 チペピジンヒベンズ酸塩-咳を抑える。 d 正
[12]	2	a 正 b 誤 ジヒドロコデインリン酸塩は、<u>麻薬性鎮咳成分</u>である。 c 正 d 正
[13]	3	1 正 2 正 3 誤 キキョウは、去痰作用を目的として配合されている場合がある。(気管支を広げる作用を期待して配合されるのはマオウ) 4 正
[14]	5	a 誤 カンゾウを含むが、マオウを含まない。 b 誤 カンゾウを含むが、マオウを含まない。 c 正 カンゾウ、マオウを含む。 d 正 カンゾウ、マオウを含む。
[15]	2	a 正 b 誤 香蘇散は、構成生薬として<u>カンゾウを含む</u>。体力虚弱で、神経過敏で気分がすぐれず胃腸の弱いもののかぜの初期、血の道症に適すとされる。 c 正 d 誤 桂枝湯は、体力虚弱で、汗が出るもののかぜの初期に適すとされる。(葛根湯は、体力中等度以上のものの感冒の初期(汗をかいていないもの)、鼻かぜ、鼻炎、頭痛、肩こり、筋肉痛、手や肩の痛みに適すとされる。)

番号	解答	解説
[16]	3	1 誤 葛根湯は、体力中等度以上のものの感冒の初期（汗をかいていないもの）、鼻かぜ、鼻炎、頭痛、肩こり、筋肉痛、手や肩の痛みに適すとされるが、体の虚弱な人（体力の衰えている人、体の弱い人）、胃腸の弱い人、発汗傾向の著しい人では、悪心、胃部不快感等の副作用が現れやすい等、不向きとされる。 2 誤 麻黄湯は、体力充実して、かぜのひきはじめて、寒気がして発熱、頭痛があり、咳が出て身体がふしぶしが痛く汗が出ていないものの感冒、鼻かぜ、気管支炎、鼻づまりに適すとされるが、胃腸の弱い人、発汗傾向の著しい人では、悪心、胃部不快感、発汗過多、全身脱力感等の副作用が現れやすい等、不向きとされる。 3 正 4 誤 桂枝湯は、体力虚弱で、汗が出るもののかぜの初期に適すとされる。 5 誤 麦門冬湯は、体力中等度以下で、痰が切れにくく、ときに強く咳こみ、又は咽頭の乾燥感があるもののから咳、気管支炎、気管支喘息、咽頭炎、しわがれ声に適すとされるが、水様痰の多い人には不向きとされる。
[17]	5	1 誤 葛根湯は、体力中等度以上のものの感冒の初期（汗をかいていないもの）、鼻かぜ、鼻炎、頭痛、肩こり、筋肉痛、手や肩の痛みに適すとされるが、体の虚弱な人（体力の衰えている人、体の弱い人）、胃腸の弱い人、発汗傾向の著しい人では、悪心、胃部不快感等の副作用が現れやすい等、不向きとされる。 2 誤 柴胡桂枝湯は、体力中等度又はやや虚弱で、多くは腹痛を伴い、ときに微熱・寒気・頭痛・吐きけなどのあるものの胃腸炎、かぜの中期から後期の症状に適すとされる。 3 誤 小青竜湯は、体力中等度又はやや虚弱で、うすい水様の痰を伴う咳や鼻水が出るものの気管支炎、気管支喘息、鼻炎、アレルギー性鼻炎、むくみ、感冒、花粉症に適すとされるが、体の虚弱な人（体力の衰えている人、体の弱い人）、胃腸の弱い人、発汗傾向の著しい人では、悪心、胃部不快感等の副作用が現れやすい等、不向きとされる。 4 誤 半夏厚朴湯は、体力中等度をめやすとして、気分がふさいで、咽喉・食道部に異物感があり、ときに動悸、めまい、嘔気などを伴う不安神経症、神経性胃炎、つわり、咳、しわがれ声、のどのつかえ感に適すとされる。 5 正
[18]	解なし	a b c d 理由：正答として選択肢 3 を選択させる問題であったが、c のフルスルチアミン塩酸塩の配合目的に関する記述については、手引きにある栄養機能表示に関する記載も踏まえ、正護の判定が困難であったと判断したため。
[19]	4	1 正 2 正 3 正 4 誤 化学的に合成された解熱鎮痛成分は、腎臓における水分の再吸収を促し、循環血流量を増加させることにより、発汗を促進する作用もある。
[20]	3	1 誤 2 誤 3 正 解熱に関しては、プロスタグランジンの産生抑制作用のほか、腎臓における水分の再吸収を促して循環血流量を増し、発汗を促進する作用も寄与している。循環血流量の増加は心臓の負担を増大させるため、心臓に障害がある場合は、その症状を悪化させるおそれがある。プロスタグランジンには胃酸分泌調節作用や胃腸粘膜保護作用もあるが、これらの作用が解熱鎮痛成分によって妨げられると、胃酸分泌が増加するとともに胃壁の血流量が低下して、胃粘膜障害を起こしやすくなる。そうした胃への悪影響を軽減するため、なるべく空腹時を避けて服用することとなっている場合が多い。 4 誤 5 誤